

巣穴暮らしのアナグマ

「ほっとやまはく」
タイム⑤4

巣穴から顔を出したアナグマ

12月初旬、調査を続けている山口市の里山で、アナグマが巣穴からひょっこりと顔を出してくれました。この春に生まれた若い個体で、顔の白と黒のコントラストがはつきりとしています。アナグマは哺乳類食肉目イタチ科の動物です。アナグマの仲間にはユーラシア大陸から日本までの温帯から亜寒帯の森に広く生息し、日本では北海道を除く本州、四国、九州に生息しています。

アナグマの一番の特徴は、巣穴に暮らすことです。巣穴は世代交代をしながら使い続けます。古い巣穴は、100年以上使われているのではないかと推定しています。山口市の約7平方キロの調査地に200カ所以上の巣穴があります。

1 巣穴のかき出し

巣穴のメンテナンスは大きく分けると2通りです。一つは巣穴の中から掘った土や石などを巢の外に運び出すかき出しです。アナグマは全身筋肉質で前足の分厚い手のひらの先には長い爪があり、この前足を主に使い掘ります。巣穴の出入り口の前はかき出された土が積み重なりテラス状になっています。アナグマは全身土まみれになり、後ろ向きで土を抱え込みながら運び出し、テラス状になった土端まで運んでいきます。長い時はかき出しを1時間以上行つため、通り道は溝になっています。



土のかき出しでできた溝

巣穴から土をかき出したアナグマの母子（福田幸広さん撮影）



2 巣材の持ち込み

もう一つは巣材の持ち込みです。落ち葉やシダなどの下草を抱え込むようにして巣の中に後ろ向きで持ち込みます。特に子育て中の雌は頻繁に行い、まるで後ろに眼がついているかのようにスムーズに巣材を持ち込んでいきます。アナグマが生活する巣の周りは落葉や下草が少なくきれいで



巣材を持ち込む雌

3 巣穴の内部

巣穴の内部はどのようなになっているのか、どんなところで寝ているの



巣内部のトンネル通路から出て来たアナグマ（福田さん撮影）

か、出産育児はどのような場所で行っているのか、冬眠中はどのような過ごしているのか、さまざまな疑問が湧いてきます。巣穴の入り口からは巣穴の内部がどのようになっているかは分かりません。

無限軌道付きのリモコン操作のできるプラモデルの車を改良し、小型カメラを付けて、巣穴に潜入しました。狭い入り口から約2メートル入ると広い部屋に到達し、そこには4カ所のトンネル通路の入り口がありました。なんとその一つからアナグマが顔を出しました。トンネルは狭くアナグマの顔がやっと通ることのできる大きさです。無限軌道車ではトンネルへの進入はできませんでした。

4 探索カメラ完成



長さ10メートルの巣穴カメラ

通路であるトンネルは狭く、ファイバースコープ状カメラは利用できないかを検討しました。はじめは市販のホースに小型カメラを付けて中に入

れましたが、木の根や石持ち込んだ巣材などで進めません。さまざまな素材を試し、たどりの着いたのがDIYショップなどで市販されている電線などを包埋するフレキシブル管でした。軽くて強く、力を加えても折れ曲がることなく、木の根の間をすり抜け進んでくれる素材です。広角レンズ付きの小型カメラ部分にはLED

（発光ダイオード）のライトをカメラの直径に合わせて特別に作ってもらいました。カメラの先端部分にはレンズが直接壁などに触れないような仕組みも必要です。炭酸飲料水の500ミリリットルの空きペットボトルをレンズが見えるようにくりぬき先端に付けました。

5 部屋とトンネル通路



巣材の敷かれた部屋とトンネル通路

巣穴探索カメラが完成した後に、多くの巣穴の内部調査を行いました。掘り出した土の量により、巣穴の複雑さは違いますが、基本的な構造は似ていました。アナグマが足を折り畳んで進むこととしかできない狭いトンネル通路と、アナグマ数頭が寝ることができる天井の高い部屋の部分からなっていました。部屋には、巣材がある部屋とない部屋がありました。各部屋にはトンネル通路の出入り口があり、迷路のように入り組んでいます。トイレ部屋のあ

る巣穴も複数見つかりました。アナグマは1日の半分以上を真っ暗な巣穴で暮らしています。巣内では視覚に頼らず、においや音声を利用して暮らしているだろうと推測しています。

田中浩（動物担当学芸員）
▽次回は来年1月10日です。

山口県立山口博物館
TEL 083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで。

